



觀安獨吟集

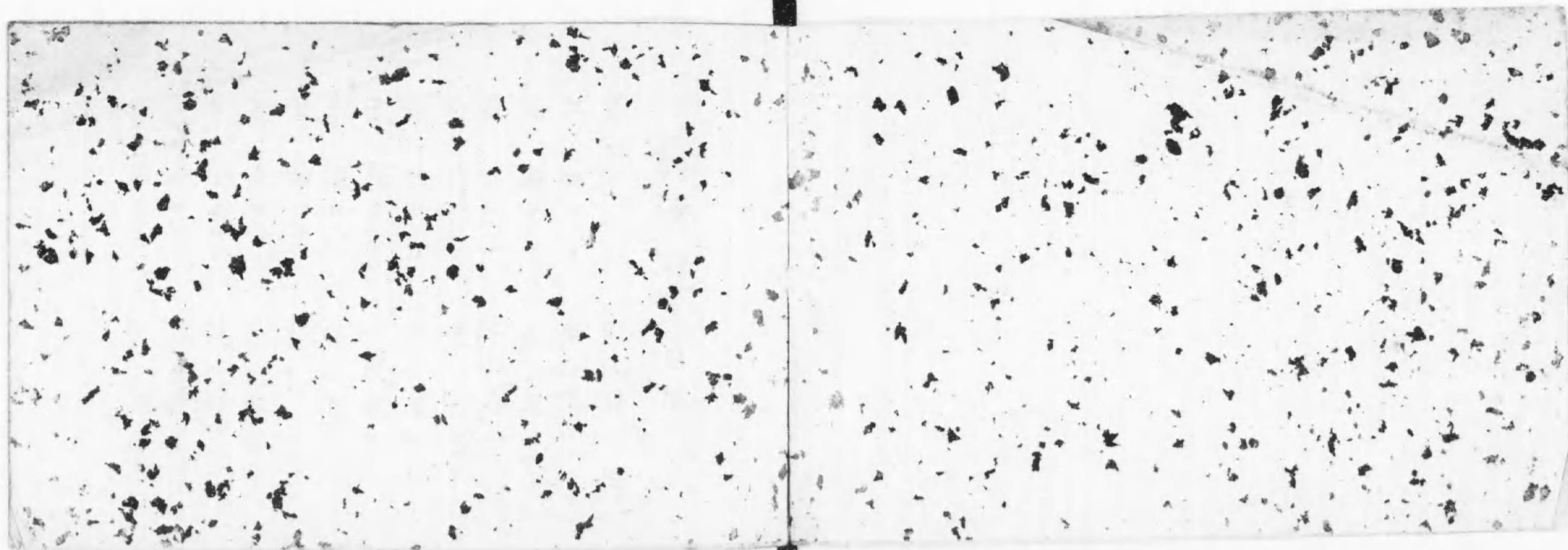
特117  
173



始









獨吟集 目次

高砂一丁

江口七丁

鶴飼十三丁

兼平十七丁

紅葉將廿三丁

頼政廿五丁

天鼓廿七丁

實盛廿九丁

玉葛卅五丁

養老卅九丁

采女卅四丁

小袖曾我早九丁

柏崎早二丁

田

斑

難

千

老

井

白樂天廿八丁

楊貴妃卅三丁

融 卅六丁

清經早二丁

通小町早七丁

竹生鴻早九丁

阿漕早二丁

村三丁

波本丁

千二丁

松廿四丁

筒廿五丁

廿八丁

卅三丁

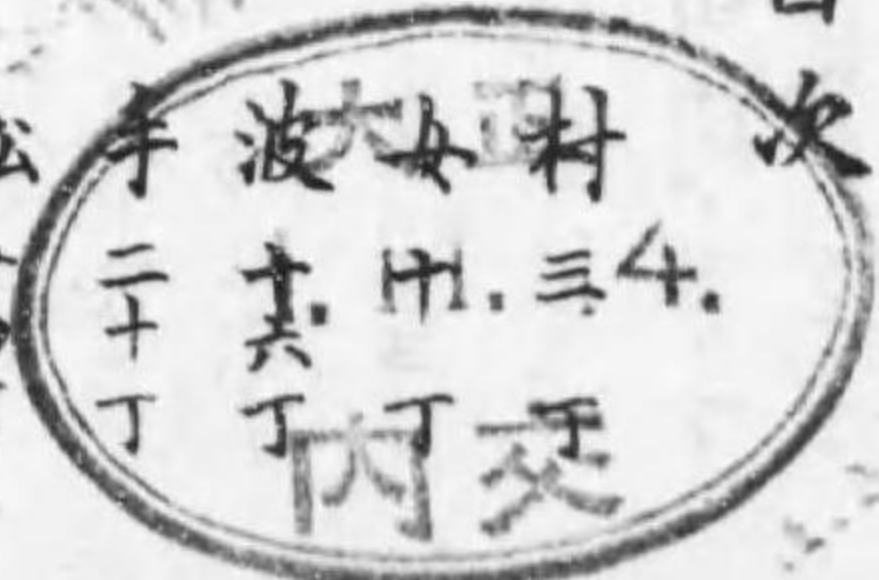
卅六丁

早二丁

早七丁

早九丁

早二丁





志賀	五九丁	鷹	六十丁
大原御幸	六三丁	梅枝	六四丁
誓願寺	六七丁	蟻通	六八丁
忠度	七十一丁	熊野	七三丁
遊行柳	七十五丁	藤戸	七九丁
玉井	八十一丁	景清	八十二丁
杜若	八十三丁	二人靜	八十五丁
安達原	八十七丁	賀茂	八十八丁
俊寛	九十二丁	松風	九十三丁
西行栴	九十五丁	浮舟	九十七丁
吳服	九十八丁	八嶋	九九丁
葛城	百一丁	海士	百三丁
鞍馬天狗	百五丁	咸陽宮	百七丁
龍田	百八丁	隅田川	百十丁
雲林院	百十一丁	春日龍神	百十二丁

源氏供養	百三丁	花筐	百三丁
富士太鼓	百九丁	皇帝	百三丁
櫻川	百三丁	山姥	百三丁
善取	百八丁	芭蕉	百八丁
百萬	百五丁	船弁慶	百六丁
女郎花	百九丁	自然居士	百三丁
三輪	百三丁	安宅	百三丁
東北	百三丁	蟬丸	百三丁
狸女	百九丁	盛久	百三丁
善知鳥	百三丁	小塩	百三丁
卯靴	百三丁	殺生石	百三丁
野宮	百三丁	唐船	百三丁
弓八幡	百三丁	鉢木	百三丁
羽衣	百三丁	芦刈	百三丁
敦盛	百三丁	葵上	百三丁



江野嶋	夏寺	西王母	夏寺
道明寺	夏寺	經	政
箴	百十	巴	夏寺
嵐山	夏寺	卷	綱
花月	夏寺	鐘	植
橋弁慶	夏寺	熊	坂
小督	夏寺	野	守
張良	夏寺	羅生門	夏寺
鉄輪	夏寺	雲雀山	夏寺
谷行	夏寺	半	蘇
車僧	夏寺	吉野	天
烏帽	夏寺	大瓶	狸
鶴龜	夏寺	春	榮
土如	夏寺	舍	利
小鍛冶	夏寺	合	浦

莫流	町	夏寺	六	浦	夏寺
金札	夏寺	大江山	夏寺		
岩船	夏寺	俊成	度	夏寺	
七騎落	夏寺	弱法師	夏寺		
絃上	夏寺	放下僧	夏寺		
籠太鼓	夏寺	枕慈童	夏寺		
胡蝶	夏寺	松	虫	夏寺	
鳥追舟	夏寺	水	濤	夏寺	
雨月	夏寺	土	車	夏寺	
國	栖	雷	電	夏寺	
菊慈童	夏寺				



高砂

上高砂のく尾より松を年  
少く老乃波もよりくおち木乃  
下陸の唐松かくなる運命あらんて  
程いままかひの松をれええ  
高砂

同

高砂の松を治する時  
凡枝をあらぬ作あまやあひ  
は相まの松よりめえたりまれ  
あまあまの松をくも思やか  
おまの松ある民より豊ある君の  
恵は有り有松

同



高砂乃尾乃の松老多あり  
 曉かきく霜おれきとも松が枝  
 の葉の同く深みどりまゆる陰  
 の新夕よけた落城の敷をぬ  
 老誠あり松乃もの教う誓せし  
 色を程正木乃うらあま世の誓  
 腹きるときの木乃中ま名を  
 忠義行乃ためにも相合の松を  
 てたき

同

高砂乃尾乃の松老多あり  
 曉かきく霜おれきとも松が枝  
 の葉の同く深みどりまゆる陰  
 の新夕よけた落城の敷をぬ  
 老誠あり松乃もの教う誓せし  
 色を程正木乃うらあま世の誓  
 腹きるときの木乃中ま名を  
 忠義行乃ためにも相合の松を  
 てたき

くくく 引れそ運城樂乃ま  
 ひ 引てが歸の 小忌夜  
 引ひあよき悪魔をくらひさ  
 むるまよき壽福をくらひま  
 の民をまよき萬壽樂の命を  
 よ相合の松乃聲をた  
 けはま

田村

手入るも其かよは流きたる清水乃  
 づ 流きたる清水乃  
 の流きたる清水乃  
 くの流きたる清水乃  
 悲乃歌乃多秘手  
 よりたは流きたる清水乃







らつて教ふ身は身を高く  
て此の心はくは又くある處よ  
あれをみよしりきやあぐ  
味方乃軍兵の旗乃よよ千  
手観音乃光を教つて虚  
念は花行し千は手毎に  
大悲乃ら子か智恵乃夫をも  
めて一度もあをば千のや死  
雨あられとありかつて鬼神  
はくは亂れ居るにたてし  
くは夫先よかつて鬼神は  
らば付きよきり有様しく  
や神は呪詛諸毒薬念彼観音  
乃ちくらをあをせてはあち

還着於本入別運意於  
乃敵を七びりきり是觀  
音志は力ありと

江口

海をゆめて遠瀬の浪ま  
くらしくうき世の夢を見  
ありや乃乃響くぬ身はこれ  
あよよさよひめが松浦の  
け敷袖乃溪に塵土舟乃  
名跡ありまはさうは乃橋  
ひめそとまんたをぬ人を信  
そよ乃上と表ありや  
葉花は乃や芳野の花  
そよも雲も浪もあまれ世







元・あ・ら・り・あ・や・あ・や・あ・や  
 儼・乃・宿・思・む・かり・乃・宿・思・む  
 子・あ・ら・ん・を・た・な・は・い・ま・あ・ら・り  
 是・ま・で・あ・り・や・歸・あ・ら・り・見・音  
 償・雲・薩・と・あ・ら・れ・松・白・龍  
 と・あ・り・つ・光・り・と・も・ま・白・妙  
 此・白・雲・よ・う・ち・葉・く・西・乃・空  
 子・ゆ・き・は・ふ・有・程・く・る・松・ほ  
 ゆ・る・あ・り・か・さ・く・さ・ら・の・光・曲・れ

理女

去・る・も・我・妻・乃・秋・乃・先・子  
 か・あ・ら・ん・や・乃・夜・の・重・あ・ら・り  
 あ・ら・り・言・葉・の・人・心・頼・め・て  
 ぬ・あ・ら・り・つ・れ・も・欄・干・よ・ま・ら・り

く・し・て・あ・ら・り・あ・ら・り・あ・ら・り  
 む・き・は・あ・ら・り・の・秋・乃・あ・ら・り  
 山・鹿・乃・あ・ら・り・の・松・を・こ・ら・り  
 の・音・修・乃・我・ま・ら・り・の  
 ね・つ・れ・を・い・つ・ま・ら・り・あ・ら・り  
 め・て・も・の・か・ら・り・の・扇・を・あ・ら・り  
 て・風・乃・あ・ら・り・の・思・へ・も・夏  
 平・乃・あ・ら・り・の・あ・ら・り・の  
 ひ・乃・あ・ら・り・の・あ・ら・り・の  
 の・扇・も・ゆ・き・あ・ら・り・の  
 も・あ・ら・り・の・あ・ら・り・の  
 あり・あ・ら・り・の・あ・ら・り・の  
 あり・あ・ら・り・の・あ・ら・り・の  
 む・く・い・あ・ら・り・の・あ・ら・り・の



人をもうらやま  
たれぬ身の程を思ひつゝ  
ておとりの居る娘女が  
ひきま

月をかくして懐もあはふ  
あまき髪に袖も三重かさ  
ぬ其色衣乃つまら  
ねともわあらばと夕暮の  
月日もかきあり  
吹もさきの祭乃し引よ  
ど乃便りもきうそ  
音出の音もかきく  
契りあらよりあや  
同

の扇よりしげうらねも  
てある物の人心ありき  
やあまきさかやあ  
てう遠くうた物をく

鶉飼

面白乃あり様や感もあ  
る毎火はねろく魚をほま  
かづき上すくひあき  
際れく魚をくふ時あつん  
も報もほの世も忘れそ  
ておとりの居る水のと  
あらばあまの鯉やのぼら  
ん玉場河はあらぬか  
あまのせをね本もかき



魚のもたぬ。つらきやあ  
 かり火のもえてもやまの  
 暗くあるの思ひ出づり月  
 ありぬるやあ。あやう  
 舟のかりりきを借て。周路  
 する此舟の名勝を。一法  
 を如何はせん。

同

法華の利益うつまぬ魔道  
 子沈没。群おををすくぬ  
 ん為まきり入り。有有  
 きちうひられ。妙乃一字の  
 といま。引れを。は。し  
 の証。妙ある法と。これ

たり。経のあどあづく  
 免れ。聖教乃。あ。い。よ  
 て。あ。つ。も。あ。く。三。も。  
 なく。一。業。乃。徳。も。り。  
 て。あ。ら。や。ま。志。つ。こ。を。て。  
 う。う。ひ。か。つ。ま。い。悪。人。乃。佛。果。  
 を。え。ん。子。乃。此。経。乃。ち。か。ら。  
 あり。ん。や。是。を。見。か。を。  
 き。く。時。き。く。經。悪。人。成。  
 とも。も。慈。悲。の。こ。ろ。を。あ。  
 き。こ。して。佛。會。を。供。養。を。  
 る。あ。ら。せ。り。乃。結。縁。を。し。き。  
 つ。の。仏。果。を。授。け。ら。る。を。  
 實。に。來。れ。り。や。く。社。他。を。



はるまじかあれく

難波

難波津よ笑やよあ花燈を  
モウラシク今も春は白ひ  
きつてふきだ梅の風枝を  
らさぬよよもやうや津の  
國乃あよのりよまよる  
ある世の例こそが実道廣  
ま治めあれく

同

はらねろ乃音楽や  
時乃調子よかろりよ  
鶯歌乃樂をば月風や  
ろ共よ花をちらして

とら 秋風樂のや  
あまの風ろ共よ浪を  
うどろろろ 萬歳  
樂を 外ろりろ 青海  
波やのあ城海の 歌えな  
う 採葉老 採葉乃曲ハ  
カハハハハ 入日と振ま  
手ま 今ろ太鼓の浪お  
れまよりてのろろろ  
はらち此音楽よひつ  
人作よ又出天下を守り  
さむる天下を守り海  
樂ろめで

兼平



上  
 多會三ふ乃。機を頭わして云平  
 人乃。危徒をおき。圓融乃。法を  
 曇。あまの月の横川をみくあり  
 や。柳又。麓の丘は。波や。志賀幸  
 寺乃。一松社。社の神輿乃。成。葉  
 の梢。成。べし。あ。浪のこ。あ。れ。棹  
 こ。か。せ。ゆ。く。程。よ。遠。く。も。う。か。向  
 以。乃。う。ら。浪。を。栗。津。の。森  
 ち。ち。う。く。吹。て。流。は。き。き。は。は  
 波。の。音。あ。が。ら。れ。山。様。の。青  
 葉。ま。て。面。敷。を。夏。山。乃。う  
 つ。り。ゆ。く。や。ま。海。の。深。木。松。の。志  
 ば。く。も。眼。了。惜。ま。は。あ。忍  
 り。あ。ま。ま。く。機。ま。か。の。雲。は

早く思はせりく  
 同

美。兼。平。の。か。く。ぞ。も。あ。り。て。戦。ふ  
 其。際。あ。も。あ。家。は。は。所。供。と。心。よ  
 か。く。る。ば。り。あり。柳。を。は。魚  
 の。び。も。敵。乃。方。は。ま。き。ま。て。水  
 曾。殿。う。れ。給。ひ。思。と。い。ふ  
 の。お。聲。を。ゆ。き。も。い。ふ。今。の  
 何。を。う。期。す。べ。き。と。思。ひ。定  
 て。兼。平。を。是。ぞ。家。の。の。意  
 言。と。鏡。ふ。ん。ど。り。大。音。あ  
 げ。木。曾。殿。の。所。内。よ。今。う。井。の  
 四。郎。兼。平。と。あ。の。り。か。ま。り。て  
 大。旗。よ。わ。り。く。い。ま。は。奉。り



一、海軍少佐の秘術を顯し大勢  
 を襲撃する。行は違つめり。磯う  
 川、後、た、ま、く、り、ぎ、り、結、手、十、文、字  
 は、打、破、り、か、き、通、り、て、其、及、自、害  
 の、手、本、も、も、て、太、刀、を、く、み、入、つ、  
 け、う、さ、海、は、た、ち、て、つ、あ、ぬ、れ、う、  
 勢、子、き、り、あ、ぬ、ひ、ら、か、家、後、乃、志  
 ぎ、目、を、た、ご、ろ、ろ、あ、り、き、海、か  
 正

千手

一、素、戸、を、ま、る、く、と、押、ひ、ら、る、み、ま、あ  
 進、風、自、ひ、く、る、花、れ、都、人、よ、ま、つ、り  
 一、あ、ら、り、み、ま、る、く、と、押、ひ、ら、る、み、ま、あ  
 一、ま、る、く、と、押、ひ、ら、る、み、ま、あ  
 一、ま、る、く、と、押、ひ、ら、る、み、ま、あ  
 一、ま、る、く、と、押、ひ、ら、る、み、ま、あ

前、記、の、ま、紅、塔、に、秋、た、が、思、ひ、で、  
 と、あ、り、ぬ、後、人

同

一、海、軍、少、佐、の、秘、術、を、顯、し、大、勢  
 を、襲、撃、す、る、行、は、違、つ、め、り、磯、う、  
 川、後、た、ま、く、り、ぎ、り、結、手、十、文、字  
 は、打、破、り、か、き、通、り、て、其、及、自、害  
 の、手、本、も、も、て、太、刀、を、く、み、入、つ、  
 け、う、さ、海、は、た、ち、て、つ、あ、ぬ、れ、う、  
 勢、子、き、り、あ、ぬ、ひ、ら、か、家、後、乃、志  
 ぎ、目、を、た、ご、ろ、ろ、あ、り、き、海、か  
 正



小腰さへも愛めり居くぞ八橋の雲  
 井此都のつらまゝの三行の國を  
 白菊から箱根うちすまて感  
 やまらん星月夜を海から山は入  
 一もばらうき限りて思ひ  
 はあられの夜そまのびねは昔  
 をと日妻の燈暗うしての夜行  
 がからわんごの雨を志ま  
 の空四面は焚火のきれら  
 作らるるをひまの袖思ひの色  
 やぬぬ境は遠くへて思ひ  
 けふはえの枯くたな花さく十  
 羊の袖あらばぬてねくはらや  
 かん

紅紫袴

河乃流せよ酒をらそ  
 見せてはよきまはらうか  
 たらそ夜はまらう留ま  
 ひが若木はあらはせは  
 も立地の前き山登る昔の酒  
 作る苦くはら

同

まされはれら酒めれ道の橋  
 お屏をれはれ酒飲酒をら  
 へ邪婦を語るろたは花  
 くらから染まき世もた  
 ありの心様もその刀も  
 あらん



前世の契り清らなる情  
 けきみえてかきしも風の  
 草葉の露れかきしも  
 そ頼みゆく末にちかき  
 うちつをよみの心ちか  
 まじらうるの氣色しあ

老松

花の袖 是の老木の神松乃  
 是の老木の神松乃ちよハ  
 る云よけきる石れし  
 りて昔のむきまで  
 ままぐ松竹つるかめ  
 心をしつる此まの

まもれと秋神詠入つきを志  
 外に松竹も梅えびさ  
 雲さめてたきれ

頼政

名も似て月こそ出き朔日  
 ぬき 秋をたけは影み  
 けきし 志海舟山  
 もけもたほろく  
 非をこらぬ氣色これ  
 名もたけやちち  
 治の里の中増え洛石

升舟

名もぐりや在る寺乃たうりて



松をたたる塚乃草是社とれ  
 よあまの跡の玉木まき乃徳  
 虫の入り月の名跡あるらん  
 若くして露深くと古塚  
 乃真あるれいづ人の徳あり  
 けき氣色これく

同

つ井筒つ井筒つ井筒  
 かきつ井筒つ井筒つ井筒  
 外おつ井筒つ井筒つ井筒  
 あがりみえつ井筒つ井筒  
 一の池を見えつ井筒つ井筒  
 平乃面敷つ井筒つ井筒  
 天我あがらつ井筒つ井筒

きい乃窓の志ほめる花の色か  
 うて白ひゆりて在るの寺の  
 鐘もほのくし月まはち寺の  
 松花やまをばだの夢も夜に  
 醒はきりゆめは破すあまの

天鼓

面白や時をききし杖も楽れ  
 や松の吉柳葉を拂つて月も涼  
 しく星をそあひる空あれは鳥  
 籠は橋の冠は紅雲まき三星のや  
 うたの前よか冷くまを更て  
 夜を寝もりや成ぬ人問乃水ハ  
 南星を北よたんぢくの天乃海  
 づら雲の後をらそや呂水れ







法乃教へてむもさぬ金のを祭  
にほくさむおごる至らぬ  
甲 けい

同

又入威が錦の直密をさるる  
私あらぬ望あり。あ威都を  
出。時宗威公より松原の郷へ  
の錦をきて。帰さしつる。奉  
あり。入威生國を都。前乃老  
る。依ひ。を。年。際。鏡。つ  
き。ら。れ。て。む。さ。し。長。井。子。居。信  
仕。り。依。ま。さ。此。度。の。國。は。下。下。と  
て。ゆ。ゑ。受。て。討。死。仕。る。べ。し。老  
ぼ。の。思。出。是。も。さ。し。つ。る。免。あ。せ

と。ゆ。ゑ。さ。し。つ。る。は。若。地。の。錦。乃  
直。密。を。く。だ。り。お。り。思。ひ。お。も。ひ  
が。古。手。も。も。み。ぢ。塔。を。わ。ま。さ。つ  
ゆ。も。バ。錦。ま。さ。て。家。は。歸。ふ。と。い  
や。さ。る。後。と。續。し。も。此。本。文。の  
心。あり。ゆ。ゑ。も。も。古。き。案。買。際。か  
錦。乃。後。を。と。念。御。山。は。離。れ。ん  
の。る。威。ハ。名。と。也。國。の。故。は。あ。げ  
か。れ。あ。ら。ず。し。ら。ん。名。の。末  
代。乃。月。の。月。の。よ。ん。が。ら。懺。悔  
物語。や。と。い。ふ。

同

其。難。心。の。終。極。の。道。め。り。く  
て。又。及。ば。木。曾。と。い。ふ。も。む。した



くろくもて手塚めし蘭らき志。五  
 念き人うまあり。つらも兵初と  
 おのり中も先まき。手塚  
 を即光威一印おの封を討を  
 一と。かき蘭らりて突威と  
 押あらへて組敵を。あつれ  
 どのまき日本一剛の者と軍  
 降せよとして。戦乃前編は押住  
 一。首めさきまらり。捨るせり  
 一。手塚の古郎。突威をら手  
 一。まわりて。お摺をき。揚て  
 一。乃て。敵をまき。担ぐ。二。足  
 一。あひは。つと。落さる。か。老武者  
 一。の悲。まき。軍。まき。の。れ。た。能

よちめ。花本のカキをれ。手塚の  
 志。ま。あ。敵。即。お。封。あ。ひ。て。終  
 一。首。ま。か。ま。ね。し。て。降。息。ら。出  
 一。と。あ。つ。た。敷。え。か。ら。ち。ま。あ。き。あ。の  
 一。影。も。形。も。南。無。阿。弥。陀。仏。吊。ら。ひ。く  
 一。あ。び。給。あ。と。と。あ。ら。ひ。て。た。び。給。へ

楊貴妃

我れそのむと。累乃。諸仙なるが  
 昔のちれ。と。あ。つ。た。か。り。人  
 累。よ。生。れ。ま。て。楊。家。の。傑。家。よ  
 養。れ。い。ま。ま。る。人。あ。る。ら。よ  
 累。同。ら。れ。つ。い。ら。ま。め。出。威  
 官。一。定。め。た。地。給。ひ。借。老。同。定。ら  
 一。か。ら。ひ。平。縁。つ。ま。ぬ。ま。い。た。ら



又此鳴よきひりり海り  
 てまき水きあされしうれま  
 ちのたまたまあひ入しり  
 日乃後君かみせむつこ  
 飛きん地の言の葉も如き  
 なるけめこの藤のひと  
 りだまの強の思ふあらひ  
 してやな肝あれて程う  
 ぶちらぬふれりあうり  
 人よあうひてまきす  
 ものうきえぬ者定融  
 まく時きあふこりおれ

まれ

山鳥

入雲の雲霧のく迷ひ  
 やらかりきと初瀬の山  
 飛のきくあうて霧もあ  
 毛敷のあまのりのま  
 うらあやうらこか  
 毛根のあ人も思ひ  
 のうきまもも織倫有  
 振あるひわきあうり  
 の思ひまむきひあ  
 やらより出るも  
 だんまみだれつる



愧しやん 洗を執をひらるる心  
まら乃玉うら心真如の玉う  
つらあがきの夢路の覚よまら

歌

あやいよし月よぬらうら海  
の浦わら秋もあうぞめて  
も松尾もまありや霧の籠の時  
かたれた秋もま渡り昔乃跡を  
陸奥乃ちうの浦わら泳めんやち  
かうらわをあらん

同

詠めやあうら空の白雲のま  
や暮そむるを山乃嶺え木深く  
んなるのあや實可あらん

別れ社大をらや小塩乃山えを  
ふ社の後トうあつらあ程と  
の勢終やあつきても秋の凡  
んあまきやあつて西のま  
か何くぞ秋を早く半あ  
ま作松の尾乃尾あまあり  
嵐更け秋け夜のあつたのま  
月影よあつた塩よまとして  
際もわ照月よあて 興よ  
あして 秋とあまきまあま  
秋乃よれあが物清くあやま  
づいさや塩をぬんとて持や田  
子乃浦あつまららきの塩衣  
ぬバ月とも袖よえち塩の行よ



蹄の浪の波の老人の心  
塩屋の心は縁を断つて  
心もろくもなき心もろく

同

又の西の山は日暮りまじり  
ありし青陽の暮の始なり  
日月の影を舟もたし  
又水中の遊魚も  
よれ飛鳥の引け陰も  
輪を降るは水も  
鳥の池邊の樹は宿し

秋の夜を鳥もあまの鐘も  
空を月も影も  
て雁がけ雲と成るは光陰  
よらそなれて月の都は  
すわひあり名跡の面影  
やあよりを乃面影

養老

長生の家は老を  
あるあるは是れ年  
あるあるは世のため  
岩井乃水も薬も  
くもろくもろくも  
すきれ



同

老をたゞの暮のまじりて感乃人  
 の身は薬にあらば何事も毒  
 命を盡すも果てたか  
 りもさるるや氷のたすめる  
 衣代りて流るる秋の  
 豊はまの秋の

同

君をさよふは氷のまじりて  
 さよふは氷のまじりて  
 くは代りて幾久も平あを  
 トやうきせし君よひらぬ氷  
 のおこもる時をば思はぬ  
 津の氷のまじりて

もよみの御代おれや  
 乃みちふりありあや  
 萬歳

清經

諸の徳神三寶も松果は  
 心ほろくして門の氣さうしあ  
 ひ加をたして足ふわ車地  
 まごころと還幸あなる  
 家味ながさ海  
 家は長門國へそ敵むら  
 中へ久又母はみよきていつく  
 ももあぐれ物心乃ちちそ  
 徳ある宮や世中のうら夢  
 袂あれ保元は妻の花壽  
 永の秋乃紅葉とて教はあり







同

叔父の道もさういふ事もなく  
 ききかへしほめを祈りたまふの清  
 浄山の鉄城雲のたつてをいつい  
 うまのの。念をうろく邪見の眼の  
 光を欲せり。通玄道場無明の  
 法僧も又さう敵うつぬびくかうじ  
 は西海四海の因果をみきこふ是迄  
 ありや。誠の寂野に十念をいぬぬ  
 法乃亦頼る。まよは疑ひもかく  
 突もころぬ。信強が突もころなき  
 よつまが因果をえり。さうありか  
 こきれ

采女

昔の天恩勅は随日みちのくれ  
 志のぶそちなり。涙も皆もも  
 ねろそちありとてまじきあはし  
 ありしをれ。もあどやん大  
 君は。はけさる。采女成り女  
 の。さうき。この。さう。露け  
 は。心。け。教。感。を。う。た。あ。い。い  
 け。れ。あ。さ。う。山。陰。入。る。山。井  
 け。あ。さ。く。あ。ん。を。思。ふ。う。の。心。乃。花。ひ  
 ら。き。月。を。さ。さ。り。雲。静。ま。安。全  
 を。あ。い。と。や。さ。ら。采。女。乃。威  
 ま。の。あ。ま。ま。う。つ。の。花。鳥。は。さ。さ  
 しま。雲。乃。神。げ。も。め。あ。さ。う  
 ぼ。の。海。の。み。き。乃。折。も。采











上白の海乃島々國のあふらほ  
 毛き山々もまあれや花ぬけむら  
 ら白雪のふるまはる時きらぬ山  
 ち敷の富士あきも狩れえくる  
 妻乃日は比良の根鹿鳴とてそ  
 仲僧のふもつまの旅れあらは  
 思ふはも雲井れよそよかへも  
 行後舟はなれ夜浦を隣て  
 氣色あり月海よりうむてぬ  
 うけはも浪とてさへおら面白乃  
 鳴のき〜るや

同

上白の海乃島々國のあふらほ  
 毛き山々もまあれや花ぬけむら  
 ら白雪のふるまはる時きらぬ山  
 ち敷の富士あきも狩れえくる  
 妻乃日は比良の根鹿鳴とてそ  
 仲僧のふもつまの旅れあらは  
 思ふはも雲井れよそよかへも  
 行後舟はなれ夜浦を隣て  
 氣色あり月海よりうむてぬ  
 うけはも浪とてさへおら面白乃  
 鳴のき〜るや

拍子



都乃麻乃...  
 ぬらぬらぬ種...  
 まぎらぬ...  
 びまぬ...  
 乃里...  
 のあさ...  
 花...  
 て西...  
 池...  
 乃妻...

同

教の本...  
 くかま...  
 とき...  
 社の...  
 乃...  
 と...  
 南無...  
 親...  
 乃...  
 乃...  
 乃...  
 乃...



終にばちを

同

悲しみの涙眼は遮りての煙胸  
よら備具を穿てては三昧の  
流れては人同の妄執の暗翳  
ま雲のまの月乃かきや隙を  
た真如平おれ曇り至らんとた  
も教うびして煩惱のまらあ  
結ばるまぬるうまき罪障  
乃山高く生れ死の海ふり  
くまらしてう洗生は身を浮  
ぶんと実教も人も人ばれ  
三口一意三乃千の道はぬかり  
まはきばるるえ乃法も

三界心あり心外なる法心  
及能生と同時に是三無差別  
伊難忘るべきも已に乃法心  
末の心の津去成べくか尋ね  
くらん此寺の法地蓮のえん  
みをととどかきらららん口ねが  
かくの教頼りてをかれ助航  
ごらねの岸は至ぬべし作樂を  
極めある教あまると生れ行  
道標と乃品あれや實の他は  
くどくあつの償のま成教の玉  
乃茶臺もつきの樂を極め量  
あき命の法心へは我れ成  
す方乃世界成へしは願誤



今宵の我らがねがひ  
 業のゆゑに海をこら雲のたおひ  
 山や西乃空の彼國へ通つて  
 つ洋雲の縁をあやむをひく  
 一し称名も鐘の音も曉りき  
 て燈のよみも光りてあやむありや  
 南無拜命はたきねがひをうあ  
 終る

阿僧

一も徳も出雲の約あがら  
 頭きつて靴の浦あやの縁  
 値遇のれに樹乃宿りも他生  
 の縁と同物をあやも亦乃世  
 志値遇をまきし松蔭の浦あ

せびる墨衣 月も夕暮の塩  
 煙まそふかきや海火の陰を  
 ほのちにかきこめて 海邊も  
 へ村霧よ 村あや手織のあ  
 まつあざりな〜〜りか  
 うきぬ志つむ〜〜り平織  
 一もあや〜〜りつら暗くかき  
 書〜〜り海をこら雲のたおひ  
 山や西乃空の彼國へ通つて  
 つ洋雲の縁をあやむをひく  
 一し称名も鐘の音も曉りき  
 て燈のよみも光りてあやむありや  
 南無拜命はたきねがひをうあ

同

今宵の我らがねがひ



とも因果のめぐりあるは車は  
 業つやうらるるめぐり目らまへの  
 地獄も滅ありきにあうろくは  
 きまきや思ふまうはめ  
 いふくはつらやりの名は  
 あこぎうはつらよおほ執心の  
 心ひくあこぎ手はうろくは  
 のめくも悪無毒唯にあつては  
 蓮大ぬ蓮乃珠イををらぬ骨  
 深くさきさけお慰め焦熱は  
 然の燈きあり。雲霧もちり  
 際そある。冥途の責も。度重  
 るあこたが浦の罪科をふた  
 きはへを撥んよもまけぬへや

たひんしてまゝは入るはきり  
 まゝあこら感入はけし

老賀

引ま借し一君が作りのを記を  
 やま乃花を塵はまのやをあら  
 かむはは心せよ 引まこわし  
 てまの内きもふたり御神  
 樂乃 妹忌の衣はまら  
 祀ちてまほれ白和幣 松のま  
 の 青和幣はくわやうるを  
 のさゆミ藝乃の邊をすく  
 へ道えありあへる花の雲  
 のハ袖をなすくればお針の  
 袴のすばをやうの拍子をそらへ







目もかへしびんくらきより暗きなりふ  
くふもききんせいのかよ懸き出れ落のり  
るまよてらせらぬ端の月と共は海月  
そよよきり海月とたよりりよ  
きり

大原御幸

水乃音りよすしあてりくくく  
垣まおたい乃山法よかくた筆よ  
も及びかてし字乃清堂あり  
やぶきていきりてんれ香を焼  
どほりたりそ八月も又幸位  
の灯をかぐくくかる所が物也

同

ある屋 別巻過夏もたきま  
まつりたりあきふ青茶よ  
お夏木出ま乃名あづき  
まよしきよはのから白雲ハ敷  
あー花のからこや 夏あろ  
志をんがるれろこあくけ  
入給ふ道の末 別巻とてや  
お家老乃移あれた光の敷と  
借めたな 別巻の如きもゆらけ  
まの里松がえよ集るこや 別巻の藤  
浪あつ如きて 是も所幸と  
尚が復は青茶かくれのねる梅



つらきものもあつらひの中を  
かふるる根をたぬく敷魚より  
梅もかたきれしや此法華宗  
れはほろの志りう移り有ま  
居成へり

梅枝

うかづけし身れ昔をいんぎも語り  
やさん法もも枝あがらぬしれ  
き意路られたるれあがく懸  
又摩きもよけれの老女の  
髪ゆひりひあるも意夜り妻の  
雀と戴し此狩衣をまじつ常  
あおちし此吉敷のねえを  
さす殿敷の枝がらぬ珠の

心あらうしほはあまの  
一の今れ教や思ひ出る一念  
の發のやまもつづつ  
染ありも故人の教あれ思ひ  
く意もひき草を住吉れ  
よたふてふ花あきハ手打や  
し梅心熱りあさきぬり思ひ  
熱心たまきほへり

同

外面白やねあしを  
かあてく愛慕の心をよめて  
だくしらハ空靴の雲霧を  
お花れ月あがく映夜半樂を  
あてん心を共は便吉の松乃



















て八重ひるま九寺に宿願を  
なすは甚なる事なりと云く

同

河原村にてとて行はるる心乃  
程なく車大崎や宮波の地  
を堂より少くかきし親音を  
同宿あり。開掘救世の方便あら  
よらちの心を海をも給や  
舟りの末きくは頼き命めあらむ  
乃愛宕の寺をたてし道の  
せりや。又たせりや。此道の  
冥途は通ふある物を心ほそ鳥部  
山。煙乃もあも薄霞む。色も  
松鷹のよこたなる。北斗の星の

曇あき。此法の節を用くある

後如堂の是かきよ。其壘乳根  
を尋ぬある子安の塔をさゆを  
た。其妻乃際かく馬の道。此や  
程もあく是なり。車宿り  
馬留め。此より花車たりある衣  
たり。皮がらき。さる海乃から路清  
水乃。此乃。此まへ。念誦して母乃  
祈。此を申す事なり

同

得三妙く。此を。花やあらぬ  
様の。祇園林下。此。南をりる  
眼。此。大慈擁護の薄霞。然。此  
現。乃。つり。ま。此。同。此



はれ。福寿の山より紅紫の霞を  
かき。茶の秋。花の春。清水  
の池。花のめ。頼る。き。事。ち。り。  
松盛

進行柳

うのか。洛陽。清水。青。れ。い。し  
五色。よ。み。え。龍。浪。を。弄。登。と  
一。水。上。金。色。の。光。り。さ。し。行。水  
れ。柳。忽。ち。揚。柳。親。音。と。あ。ら。ぬ。れ  
今。う。は。絶。を。ぬ。終。と。あ。る。か。生。あ。ら  
た。あ。る。歩。を。と。と。ふ。地。也。は。き。ば  
都。表。花。威。大。宮。人。の。洋。遊。あ。も  
遊。鞠。の。度。れ。面。四。本。乃。木。陰。枝  
あ。る。さ。る。さ。う。に。あ。る。皆。れ。音

柳。様。と。ま。ま。ま。ま。て。錦。を。か。さ。る。  
諸。人。の。花。や。う。あ。る。や。ら。な。れ。際。際。く  
る。風。の。自。由。さ。り。年。旬。乃。席。の。外  
程。も。あ。が。三。思。は。た。ら。れ。茶。の。を  
柏。木。れ。及。び。あ。る。意。踏。を。し。あ。し  
や。是。を。た。た。る。柳。冬。の。柳。衣。を。か  
さ。さ。り。も。風。も。あ。る。よ。是。を。し。の  
よ。わ。き。え。さ。り。や。老。木。の。柳。籠。が  
あ。ら。し。て。よ。わ。く。と。ま。ま。あ。そ  
夢。人。を。現。と。み。る。そ。う。れ。ま。

同

柳。乃。曲。も。教。養。の。菩。薩。れ。舞。乃  
襟。を。な。く。く。え。よ。人。乃。由。法。を。う。を  
あ。ら。し。と。執。游。の。舞。も。是。迄。あ。り。と























乃長きの命のしきあらを  
き命のしきあらを思ひありけ  
浦も身もさるに御あはれなく

賀茂

名川やせえらお何のまよきれち  
くも月もあがれと尋ねてぞ  
も傳も同じ江は清らぬ心きて  
竹鏡ひらきまの年の矢も早くも  
びる光陰をまもぬらぬおも  
しみの水清きおももつきて絶えぬも  
手向成きる

同

せり水もなまや成りあるらん  
くも岩根ねがねきりきり  
流きまらむれ音ある水やまね  
作一水もあきみり大井行り  
れ紅糸は雨ふる花のすこ  
け産産あるはもなまなる  
免清流は水くまら高根は  
深きとまぬるま 朝日まらあ  
てぬらよ 八まぬ音羽は浪  
ぬもくもてかあり乃雪もあえ  
難く捕も 死るも 祝もたれ  
むらむれくも同じ花あきき  
あの日も冬の現るもつらふ敷  
の春あがら湯もあきり水もあ  
の春あがら湯もあきり水もあ

くも岩根ねがねきりきり  
流きまらむれ音ある水やまね  
作一水もあきみり大井行り  
れ紅糸は雨ふる花のすこ  
け産産あるはもなまなる  
免清流は水くまら高根は  
深きとまぬるま 朝日まらあ  
てぬらよ 八まぬ音羽は浪  
ぬもくもてかあり乃雪もあえ  
難く捕も 死るも 祝もたれ  
むらむれくも同じ花あきき  
あの日も冬の現るもつらふ敷  
の春あがら湯もあきり水もあ  
の春あがら湯もあきり水もあ







酒の谷水の流るも又磯の水  
の類ある物を物とす時にも  
限り成され

松風

月を遠く陸奥の具名や  
乃若かた後 賤が塩木をさ  
向あきぎさ浦より塩一其の  
海乃ささる浦二度世も出  
松の村並うまき日は塩路を  
あさかしの引れあはる海  
あさかしのねる月よりは  
何のや 松の塩をささ  
ぞと入る流るつきの  
一の塩をぬきてこれ月社

あき 月を遠く今なき  
一やも月あり 月ひら  
きはさし 塩乃よの車は月  
ささか 共思ふ塩路

同

あき 月を遠く今なき  
心程氣よあれ衣の已れ日  
やゆふ 月を遠く今なき  
衣の 月を遠く今なき  
の中納言よ 月を遠く今なき  
都へより 月を遠く今なき  
て 月を遠く今なき



命にまかすは度なきもの  
 思ふは心なきもの  
 忘られたるはあぢきなきもの  
 今あるはあれはあかぬもの  
 もあかぬはあかぬもの  
 秋の深きれ 青の無きは秋の  
 かり夜かきてそ頼き同じ世の  
 僅うひあらばこそ忘れぬもの  
 あしは捨てても置きおくれぬもの  
 今立寄り起しわづれをば  
 より思ふはあかぬもの  
 今もあかぬもの

同

命にまかすは度なきもの  
 思ふは心なきもの  
 忘られたるはあぢきなきもの  
 今あるはあれはあかぬもの  
 もあかぬはあかぬもの  
 秋の深きれ 青の無きは秋の  
 かり夜かきてそ頼き同じ世の  
 僅うひあらばこそ忘れぬもの  
 あしは捨てても置きおくれぬもの  
 今立寄り起しわづれをば  
 より思ふはあかぬもの  
 今もあかぬもの

命にまかすは度なきもの  
 思ふは心なきもの  
 忘られたるはあぢきなきもの  
 今あるはあれはあかぬもの  
 もあかぬはあかぬもの  
 秋の深きれ 青の無きは秋の  
 かり夜かきてそ頼き同じ世の  
 僅うひあらばこそ忘れぬもの  
 あしは捨てても置きおくれぬもの  
 今立寄り起しわづれをば  
 より思ふはあかぬもの  
 今もあかぬもの



西行様

見わたるは柳様とこきまきて  
 都の長け錦のさくらんたな  
 の様を植れきりいろを可あふ  
 子入る千本花のり雪路  
 やまののこららん霞の堂は  
 れさうり西王天の栄花も是の  
 いままあるべき人ある黒谷下  
 伊願むう通昭傳のり  
 世をいひ花の山  
 まの花の色をきりつるや  
 一まき思ひ忘れあされ  
 清水寺の地まこれ松竹さ  
 乃音羽山あまの尾ぬとあま

ねつ 龍津 ありていもあ  
 大井 中 ありていもあ

傳

大鳥大鳥のこわらさ  
 ひるをれとあわさるひつ  
 ねこからいりてあまの歌を  
 なくぬまりのあまのつ  
 頼のまの観音は意  
 初續れたまの横川の傳  
 きたれつお野のあひ折  
 してものきりも  
 くるあまねはびえ  
 なるあまのあられ















恩愛の古柳のかげうきき  
 乃あかしのあかき秋子あはら  
 んはたはもねしんら母はあま  
 もはまよわかれ果あんがら  
 候ぐみきたりまう又思のきりて辛  
 にあたま南無の志候寺に観音  
 菩薩の力をあわせてたび給て  
 大慈悲の利縁を獲よあて龍宮の中  
 よびひられはなむらうのいさ  
 きも其度み賢達をぬまらんして  
 ぶきんしんすの守護神たけりく  
 悪くたぐみし事あはれ持しつ  
 きとまあぬ龍のまきんが  
 りむと押しめを捨ててさう

たまき龍宮のあらひに死んを  
 いぬあまのうらみはく悪龍か  
 的東乃魂とうごまきんは  
 引あをとりたりむの志らん海  
 人の海はようまひりてさう

鞍馬天狗

紀伊の岩山といひ山里のたぐ  
 使者たり馬は鞍くら腹のたま  
 うす操手は枝折をまきま真  
 も迷ひ候つてく木陰のあて  
 いさく花をまきん

同

松花のたぐひてかき  
 少あるは後雲よあまんでの



ついでに名だすに乳色や夕陽に  
花のあつり鐘を鳴りてより遠き  
奥の鞍馬の山道の花ぞあへる  
此がへんぞゆかり

同

兵部累代はまれの道きく海  
平藤四家もかお彼家のみか  
上の清和天皇は御能くあら  
く時節をかんぐまされられ  
る平家と西海はたつて一  
輪波の遠雲は能行の自在を  
てかきまをたひらき會津をすか  
ん津家と守るべし是れありや  
清和とまぬきはらう若狭

かりゆへにたふさぬある西海四  
の合戦やうた教をを難き  
矢れかたを人守れを頼めたる  
めくきふかきくらまの頼めか  
めくき後継るの本もあはれ  
くきふかき

咸陽宮

花のまらまらまらよく花  
柳花柳花柳の鶯めねあ  
乃藤の月の前乃志るの  
つたれた林原雪井よわ  
金とちよれたるもあ  
花雲のふらつたたまは  
くかきふかき











思ひ立ちらばも遠へ行らばも交り  
 紅雲がまのひの袴踏まきまの誘ひ  
 出さやまの男衆のひさしゆひれ  
 藤がうゑ志をこころをさうして  
 信濃路やその系志をこころをさ  
 此辨衣の袴を冠れこころをさ  
 づま懸ひ出さや二月乃もさう  
 月をさや入さうおぼろおぼ  
 がるまぬたつるさ候しく袖うち  
 扱ひまうさうさう志をこころをさ  
 くさうさうさうさう遠へ行

春日籠社

大徳まのつら冠をさうさう  
 ぬれ日野の月六三の雲のほ

日野乃野守もさうさうさう  
 の親生驚き此は法法林れ八  
 是道あるもさう  
 惠上人徳金唐をさうさう  
 天へさうさうさう  
 妻ぬまやさうさう  
 うあらさうさうさう  
 子花を行は龍社の猿の他さ  
 浪をさうさうさう  
 此は地にあつるさうさう  
 子懸さうさうさう

源氏供養

柞桐堂此燈の煙をさうさう  
 のさうさうさうさう



紫の終は光樹の花ちりぬ空輝れ  
 むあき世をいりての女身  
 命を親しむは雲の  
 久松樹花の露は空を  
 質の秋は空をよるや  
 く佛はあひあら排の  
 ありて世をよるは  
 里はもむも愛おむ  
 わりまぬれがき道と  
 まくらをなせ花流波の  
 浦をよるは智を  
 よるは心も  
 空をよるは宿あ  
 ねるは松花は

うも雲の  
 の月き  
 だう  
 ーある  
 もこは  
 つる  
 其の  
 ね  
 本も  
 肉は  
 子た  
 ある  
 牙の  
 方







しては居りしりく

同

御門の如く教を給りつゝ其由の  
ちを甘泉殿のかぶらうし御  
畫圖は立り以て月夜歌を  
きりしはまきかあうく  
しきせ物りひかきし事  
づき教を給へばとせうと申  
子のいしをれくま  
そりしはまきかあうく  
先づ界に録きわはぬ  
女ありは日人同し  
終はむしり仙宮はぬりぬ  
君りまうしりく

あはらく愛まねくべしとて  
懐中より及魂香をたき給  
あやまき人志のあり  
月秋あまらうれし  
あるうあまの如き  
一の思ひをのびも  
のキもたまらで  
づらよ消ぬき  
てのう舞ぬき  
乃あまの  
甘泉殿をま  
をうちりら  
楳ひりり

富士石鼓



























もひきやえしうらえしと  
どよ軽きみさう力頼めや頼め浦を  
阿弥陀仏

同

さやそごのれやこれ道よま  
とありてついでこの闇を暗や  
らぬ 錨月うらま曇り  
くまあるそな尚三界れ首を  
名半の車ねとこつとつとを  
けしてひる 後えいさりえいた  
ひきや 水車 物見あり  
く 新千の百萬が流の 本よ  
りあがきい思髪を 荆棘れご  
ととれして ありたる名ほり

引かき 又骨根くらま 龍墨  
らつ 心持 引られと人か  
ひもさも 思ぬ人を 芽ぬま親  
ふれ契りあき夜 肩を 結んで  
うまらき 此うと 結見くま月ま  
け せしうきれ 出がごまの み  
ふれ心あがら南無釋迦 阿彌陀  
と信心をいふんを 種子あてんあ  
あり

同

春良坂のこれてか ぬれつら  
さもかくすも 飯人のあき 跡の 涙  
あ袖れ志がらう 階あきま 思ひき  
あは年あき 流る月の影



西乃大寺の柳陰より子あり  
 魚白雲のたまる別荘にけり  
 らばまよきり。ひこからぬ思  
 茶茶の鳥のひきもあはれ  
 奈良に都をまわて海より三笠塔  
 海の川をうち渡りてお城を升  
 手乃里に氷のあつらひ敷う  
 つし西教津よりまの海ありき  
 かくて月日を送る身乃羊のあゆ  
 三ひまのあはれははなはた  
 北面のゆめつる。遠城の寺はま  
 つ。四方に乳を注ぎて花のう  
 きおれ電山やあはれ大井行  
 海に信世のまのあはれや盛る行

機尾の如き松乃尾の倉の里に  
 震遊こそつらき水忌の柳  
 多きの宿衣貴賤群集する此寺  
 乃法うしつらき。あはれも  
 早も。此寺より有難き。か  
 れくも。あはれも。あはれも。あ  
 二。此寺に中間。あはれも。あ  
 の道。あはれも。あはれも。あ  
 親。磨が。あはれも。あはれも。あ  
 や。かく。神カを。現。て。天。竺。震。且  
 後。胡。三。國。は。遠。く。あはれも。あ  
 子。現。れ。給。へ。ま。あはれも。あ  
 元。母。摩。耶。女。人。の。孝。養。乃。由  
 為。あ。ま。は。れ。も。あはれも。あ



道ぞうら。源や人同乃身としてお  
どか母をせしまぬ。子を恨み牙  
を咬みたる。感歎してぞ初とある親  
子ありき。乃袖あれや百萬の涙を  
見ゆ。

取丹慶

後凡も。跡を留め終ふか。く。涙を  
あぐゆ。く。この神。終て替ら。く。興  
り。ゆ。も。定め。お。か。や。お。は。よ  
り。ま。あり。て。惜。き。命。か。累。一。二  
慶。達。ん。と。ぞ。思。ふ。行。は。ま。也。

同

後。は。は。句。時。の。三。度。を。と。り。會。想。の  
耻。を。す。ぎ。も。薄。朱。切。を。お。ま。と。く。た。け

ま。の。排。の。し。り。ま。り。み。を。牙。は。任  
を。切。名。と。貴。や。心。り。く。あ。る。べき。を  
切。成。名。と。き。て。身。ま。り。う。く。の。天。乃。道  
と。心。え。て。お。終。は。揮。ち。て。五。湖。の。を  
傷。を。た。れ。き。か。お。機。も。方。月。の。月  
乃。や。こ。を。り。捨。て。西。海。の。波。濤。よ  
終。ま。の。牙。は。科。の。あ。ま。よ。を。歎。き  
終。の。頼。羽。も。終。よ。の。あ。び。く。青。柳。の  
枝。を。つ。ら。ぬ。る。由。契。あ。ど。う。の。様。し。を。ほ  
く。ま。

同

松。是。の。植。武。天。皇。九。代。乃。は。流。平。の  
多。感。其。靈。あり。を。思。ふ。や。い。く。義。経  
思。ふ。の。由。浦。波。の。ま。ま。を。あ。へ。よ。お。舟











くさげし 諸代を治め給ふも  
 萬代平服とも 銀さへ舞うを  
 人乃家とまきまよきしを  
 又天子の御難をまよらうと  
 名をたごまつり母を一皆と云  
 り 此の宮よりりりりりりり  
 君乃御座おを龍頭鶴首と  
 そ付所代よりおとれり

同

百六のきりきりきりきり  
 何のたのしみもなす  
 の志貫の浦あれは  
 志が平後のの松の

しきりきりきりきり  
 何のたのしみもなす  
 の志貫の浦あれは  
 志が平後のの松の

三輪

何のたのしみもなす  
 の志貫の浦あれは  
 志が平後のの松の  
 何のたのしみもなす  
 の志貫の浦あれは  
 志が平後のの松の



ことひびくありし懸は諸をば  
 知らざるまの心はぬまを  
 志らんとしてまき針を  
 小僧はそれをとらつきて跡を  
 ひらへてきさひやくし青柳  
 の葉あがくまきまふやま玉の  
 が力よりかまのまくりを  
 程よ。此山亭の神壇や枝の  
 枝よと海よりかまのまくり  
 一や。築り一人のまき具えの三  
 わぎあがりし三輪は縁のこ  
 一よと諸はしきと能くや

安宅

昔の安宅の氷は回をてゐた後

びとうきりしなや  
 ぶりからたぬまお開守の人  
 へ海をてあらむとして後をたか  
 び肩よりちかき虎乃尾をさ  
 蛇の口をのかきたる心りして陸奥  
 國も下りをお

東水

ま前の九重の嶺おろ雲地ま  
 の鬼門を身りつて悪魔をらふ  
 水のおと山陰のかま河やま  
 白川の浪風もいつたまの響音を  
 樂の縁をあらとく庭よの池水  
 をたかへる鳥の宿は地中北樹  
 傷をきく舟の心出入り跡



此のてをうらねまはそをほる色  
 めく有換ぬをよく花の敷あり  
 見佛回法のをすく噴煙の縁  
 さいやまの月夜胡暮は備ら  
 び元夏三伏のあつたきて秋まよ  
 たりとねごろうる洞窟の枝の成  
 聲のあまきさしよあしては求ま  
 撫のきををみせ他給ふうつる月敷  
 ぬ下化流生れ柳をえつり東は陰  
 陽れ時節をさすを志られたと

蟬丸

花叢都をまきけくうらまね  
 ぶあくる賀あけやそを白河を  
 うちわたり果栗田口よも思しう

だ冷ぬ誰をう松坂や開のてを  
 思ひよは流よあや音羽ぬぬ  
 珠をの都や松虫をひ出まり  
 ぐすの鳴やゆふ露の必祥の聖  
 心もさす母あはれど心も清  
 龍ほしあし 逢坂の開の清  
 水は影みえてそやひく見えち  
 月七日のあゆらもさつく氷もえ  
 しや野のかをこれの神あから清  
 ましや髪ぬねごろを戴き憶も  
 足されらうらそを笑けらんぬ敷  
 うつる氷をかみむゆは浪のうつ  
 あり秋空や

同



身は遠かりやらの途もな路も更  
 盡はまじ。蟬もて蟬丸。一樹乃  
 陰の宿り。さきなきなき有まじ  
 て。文をうら。宮の侍。あまの  
 と。思ひや。鈴。入。笑。い。や。や。柳。花  
 から。ゆ。き。懸。む。さ。の。あ。の。留。む。と  
 け。さ。う。と。知。ふ。雲。の。暮。や。ま。ら。ひ。く  
 ば。舟。り。あ。く。や。開。路。の。あ。ら。ん  
 ぐ。れ。ぬ。う。も。む。り。林。ら。か。ら  
 あ。そ。ゆ。く。お。路。も。あ。ま。あ。ら。の  
 の。開。り。枝。村。す。き。ゆ。き。を。人。探  
 と。原。く。あ。る。ま。は。わ。ら。や。乃。行。は  
 け。は。び。ん。て。た。が。ひ。あ。ら。ぶ。つ。ま。あ  
 同。ま。を。路。へ。ん。か。は。ま。き。け。ま。る。程。ゆ。る

通り。さ。り。あ。る。首。て。あ。く。く。と。お。も。て  
 け。ま。さ。ん。く。

程々  
 老。を。ぬ。き。け。く。薬。れ。な。を。そ。菊。は。盡  
 ち。そ。う。ひ。出。く。あ。ま。あ。ま。そ。う。わ  
 き。流。ぬ。お。途。さ。う。け。た

同

身。を。そ。つ。ま。り。あ。ま。を。ほ。き。い。ど。方。付。ま  
 ぞ。れ。竹。乃。塔。の。園。の。あ。ま。も。つ。た。そ。ら。の  
 ぞ。そ。か。ら。ぬ。杖。の。夜。乃。さ。う。ほ。き。け  
 そ。か。ま。く。入。は。よ。れ。る。あ。そ。そ  
 何。も。く。く。思。ひ。ま。う。あ。ら。地。の。あ  
 夢。は。し。も。思。へ。い。屋。を。そ。れ。ま。の。盡  
 せ。ぬ。宿。社。め。て。た。き。れ



感久

夏や池のほとりも歸るもわかれのあはれ  
 秋も志らぬ逢坂の用宗も今うの秋  
 ちよももあはれ 勢田乃長橋うち渡  
 りも去のた敷を鏡山出の三年へ  
 三あれたまの 老曾の森をさるや  
 三たまりありあつこの浦乃夕塩の道  
 せよ波よかききれはゆれを野へ  
 あらまかきまゝ入橋や高橋はく  
 出原ん坂りもまをたぬ海あつ橋を  
 渡り 橋衣かききて見んと思ひ  
 ち冷ありもる所よれ中山の是か  
 又 替もちよりの大井行もわく  
 浪もうらふ山 朝も潮も清らんが

三保井入海田子乃浦おめてこれ  
 へまのろあるもの富士のね箱根の  
 月行や星月夜や 鎌倉も志はき  
 けり

同

浦原あはれまの 雲の舞の 雲の  
 日影のこかきて 君を教ふ千秋乃つ  
 らが園の松れ花のありはるる  
 花本れらうら 長指のるれあり  
 おちれそれありまかりたはり  
 出づける感久を心れ中ぞゆい  
 けり

善知鳥

鳥親をたてて血れ 雲をかく  
 けり











露を白くしぬ幾世積りて朝と  
 らんずもつきく夢のちも泉  
 あれはなれどいぢまもつ  
 り菊水たのめはまろもかくら  
 んと心も暗かたはひるも  
 有月乃まひしあまたれ  
 栄花も榮耀をそ実況うか  
 あひまの

同

月人野の草あれどもそ乃お袖は  
 かさよつのもろひれまを  
 ぶんからうくそ終夜日を又もく  
 あきらましく眠るもかと思へ  
 晝よりありひるもなほ月

あひまのき  
 お茶も文とく  
 けまはくも雲夏秋を新木も  
 そ乃日野花さきり面白や  
 きやあきかくて対し比な  
 か十島の栄花そつまも  
 の中あれは皆きえくも  
 くも有つる邯鄲乃花のうも眠乃  
 夢を花にそり

殺生石

あま野の原もま石のかくも  
 標中跡まても執心を踏ま  
 て又まがふる若れ系物冷しきあ























ひとり終ふ去ほしは時うりて  
 矢乃羽衣浦凡ちれむきたる  
 引三保の松原うき鳩が雲のあ  
 ーちう富士は高根がまうよ  
 へく矢津みりら乃震ふまきれ  
 ーひん入りきり

夢列

あれは夢ぞよこころのまゝに  
 くのめる綱船のえりちりくもせ  
 夢ぞや名ふ志なふあには津此  
 ーし夢ぞや大文のうち遠きとゆ  
 あびふまそあまのうか海士乃  
 ーよびまそ續おゆる若うをそゆく  
 綱の目乃前ふんえたる有根の津

後をよやく面自や心あらん  
 ーく人よみそむかほのくまの難波  
 ーりけま乃まらたはほろ舟あ  
 が祀来る仲の磯磯を鳥つれとちて  
 友もや海士れ舟あらん雨よ  
 ーみるくあまの鳩もあるあれ  
 もまなをのまなあまうらん勤  
 波津のまあまや名うあふ梅  
 花たさる想てぬ鳥れ想まか  
 ーる有月乃月乃所は袖を  
 又津し女まきぬ笠れれをまあ  
 是をまのたれ波あめつたる袖  
 金ひが鈴は雨のあーんあま  
 ーを波あれららとてか入あら



日残らりしけりさきりく耕院  
のあぢきまるるる廣うれくそな  
ふ心れをいふ

同

あきばあはしく鬼神をそや  
らぎそのぬれころあをまひる  
志婦乃情志事そいまがれ  
よきらきたり律乃國志あは  
のまの多あれや声れ指染は凡  
ふまは波乃立居れ隙くもあは  
かるむりやこころの濱乃ま砂  
のあぢきまるるる廣うれくそな  
ふ心れをいふ

一樂りよぬりあふ縁こそうれ  
かりをれ

同

あきまはあはしく鬼神をそや  
らぎそのぬれころあをまひる  
志婦乃情志事そいまがれ  
よきらきたり律乃國志あは  
のまの多あれや声れ指染は凡  
ふまは波乃立居れ隙くもあは  
かるむりやこころの濱乃ま砂  
のあぢきまるるる廣うれくそな  
ふ心れをいふ

教書

あきまはあはしく鬼神をそや  
らぎそのぬれころあをまひる  
志婦乃情志事そいまがれ  
よきらきたり律乃國志あは  
のまの多あれや声れ指染は凡  
ふまは波乃立居れ隙くもあは  
かるむりやこころの濱乃ま砂  
のあぢきまるるる廣うれくそな  
ふ心れをいふ



教ふるある一塔あり舟よりき波きり  
 て多しなるもぬらぬ。竜馬は雲  
 外より群鷹はらとみざるるうら  
 定ぬあひ接衣日や重りて年解  
 乃空ゆる春ははげ一谷は霧りて志  
 ぢいぬ家は後への浦ちりしるれ  
 山風吹落て野を寒くぬる海き向  
 小舟はるるもく書くあまの千鳥  
 此きえ我袖も波はききく磯松葉  
 の昔屋はとも移しく傾たふれい  
 そあきねは生るや夕煙はまよふも  
 の柳敷て思ふやま方れ山里はるる  
 可は住居志て海はく人の歌はるる  
 門の果ぞくあしき

同

多しなるもぬらぬ。竜馬は雲  
 外より群鷹はらとみざるるうら  
 定ぬあひ接衣日や重りて年解  
 乃空ゆる春ははげ一谷は霧りて志  
 ぢいぬ家は後への浦ちりしるれ  
 山風吹落て野を寒くぬる海き向  
 小舟はるるもく書くあまの千鳥  
 此きえ我袖も波はききく磯松葉  
 の昔屋はとも移しく傾たふれい  
 そあきねは生るや夕煙はまよふも  
 の柳敷て思ふやま方れ山里はるる  
 可は住居志て海はく人の歌はるる  
 門の果ぞくあしき







くはを雲中へあらりて  
すまを雲中へあらりて  
有がまの影向う那

西日母

花を名へたやさうまこれく  
の水にたやまきちるふ  
れ袖をよみそもたおひま  
く雲の花鳥を  
雲路よりつまきま  
とねは母を依ひよ  
ゆる魚を志らぬぞ

道の古

吟今かれ作於華字の曲く

徳子うてう七拍子踏  
とらやまひ子うひあは  
とららひをまひる年  
まねまの千秋樂よ  
万歳樂よ及命を  
志まて入る花を  
木槌樹れこま  
一葉乃雨風を  
あまをうひ  
にあま  
ぬく敷き  
悩をか  
鏡は

経改



















多本此機... 表出のく...  
こころ久しき

巻端

夏は... 有れ... 自性乃...  
あま地は... 首... 天...  
あらか... 志...  
あんが... 天...  
乃... 教...  
に... 真...  
見... 旅...

びら... 契り... 此...  
... あり...  
... あり...  
... あり...  
... あり...  
... あり...  
... あり...  
... あり...

同

... 阿... 如... 十...  
... 哀... 中...  
... 薬... 世...  
... 万... 世...  
... 賢... 人...  
... 賢... 人...



日... 神... 射... 袖... 是... 神... 聲... 性...

花月

物... 花... 月... 射... 佛...

同

松... 年... 平... 色...